幼児の読字能力は早まっている

石井　私どもがやっている漢字教育というものは、従来から見るとずいぶん時期が早まっています。ですから、あれは早期教育だとひと口にいうんですけれども、私どもは早期教育などというものはあり得ないと思っています。このあいた就学前の幼児の読字能力の調査の発表が国立国語研究所でありましたけれども、あれを見ますと、四歳児で昭和 26 年の調査における小学校一年生と同じですね。二年早まっています。それは、さらに調査してみると、家庭では文字を積極的に教えていない、幼稚園でも教えていない。

にもかかわらず、覚えているというのは、子どもたちは明らかにそれを求めている。だからいつとはなしに覚える。まったく教育をしないのに、子どもたちが現状では字を覚えているわけです。私どもはそれを、もう適切な時期にはいっているから、それらの子どもに合ったものを与えよう、それが私のいう三歳からの漢字教育なんですが、なかなかそういうぐあいにとってくれないところに、この運動がもうひとつ伸び悩んでいる理由があると思うんです。

吉田　うまく伸びていない理由の一つには、みんなが同じように伸びなければならないというふうに考えているのが一般の通念で、三歳になっても、そういうものを求めている程度がずいぶん違うわけですね。そういう意味で、石井先生はどのくらい字を覚えたかというような評価をしないで、覚えれば覚えるでいいという形でやっていこうとなされているわけで、それは非常にいいと思うんですけれども、なにかあの子はこれだけ字を覚えた、うちの子は覚えない。

覚えない理由は、具体的なものと話し言葉、そこが結びついていなければ字を覚えるというところまでいかないわけですね。子どもによってずいぶん差があるということを考えるんですけれども。

石井　たしかに個人差がありますけれども、私どもの実験によりますと、三歳で覚えられない子どもは現在のところないということなんです。三歳児に対する実験というのはまだ非常に数が少ないんです。ただ、私どものやっております三歳児の実験では、みんな応じますね。漢字に対してぜんぜん興味を示さないという子どもは、小学校の一年生でまったく文字というものに関心を示さないパーセンテージと、ほとんど変わりないです。その意味で、私は三歳児というものは、もうはじめなければならない時期だというふうに考えているんです。